1985. 3
沖水試資料 No. 87
P 13～28

資　料　1

石垣島におけるシャコガイ漁業の現状

村　越　正　慶（報文とりまとめ）

石垣島におけるシャコガイ漁業の現状を昭和58年度組織的調査研究活動推進事業の調査結果より一部を抜粋して資料として掲載した。

1. シャコガイの漁獲量

八重山ではシャコガイは、ヒメジャコ（通称：ギィーラ）、ヒレジャコ（ウルギィーラ）、シャゴウ（スーギィーラ）、シラナミ（パインジァ）、ヒレナシジャコ（マーギィーラ）、オオジャコ

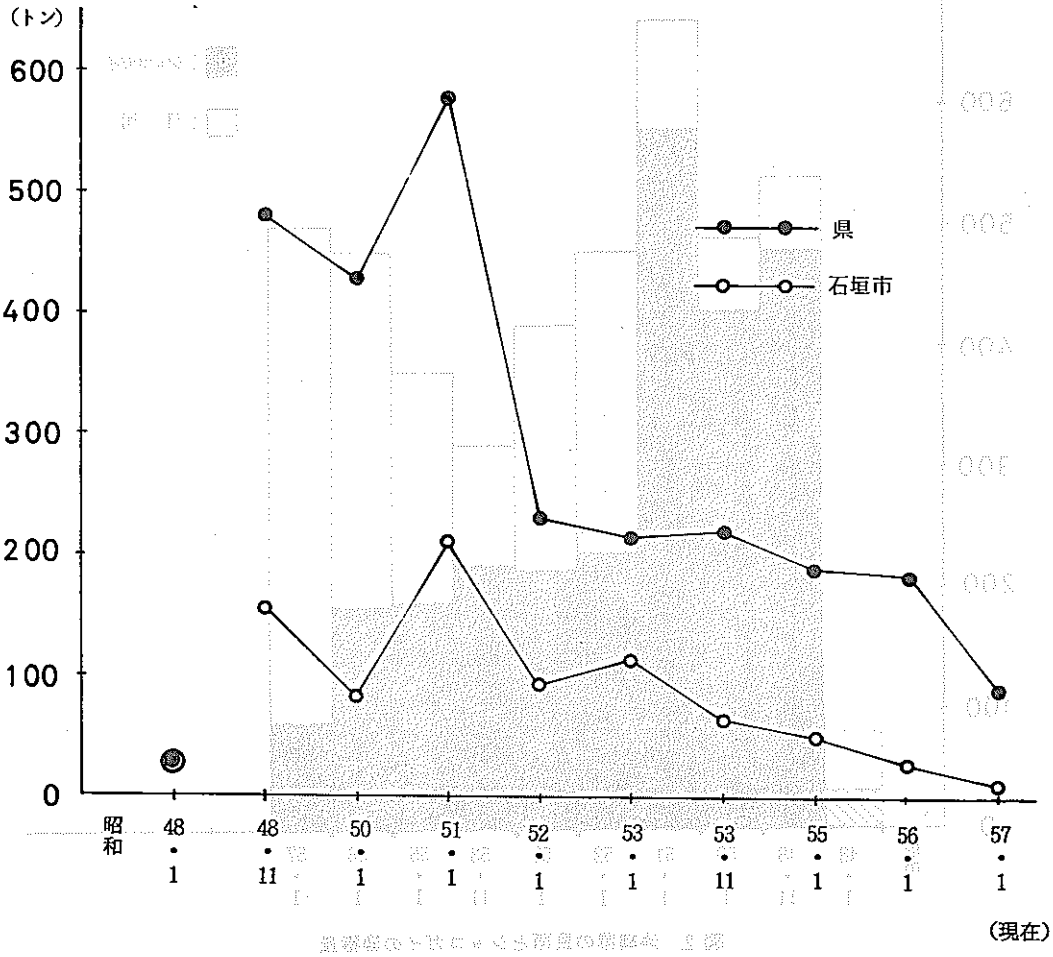


図 1. シャコガイの漁獲量（沖縄農林水産統計年報より作成）

◎：昭和48年1月はむき身重量

（マーギィーラ）の6種類（図11）が知られている。しかしながら統計年報ではシャコガイとその他の貝でしか区別されていない。シャコガイは全てギィーラと総称されることもあるが6種類中共にマーギィーラと呼ばれ、区別のないヒレナシジャコやオオジャコの漁獲は稀であり、ヒレジャコ、シャゴウ、シラナミの3種もそれ程生息量は多くなく、用途は貝柱を除くと生食からはずれることが多いこととヒメジャコが最も多産し、高価であることから、ヒメジャコをさしているものと思われる。また統計資料の作成にあたっては、複数の標本漁家に依頼して漁獲量の平均をとり、従事者数で乗じる方法であり、漁業生産額も出されているのでこの点からもヒメジャコではないかと考えられる。そこで本文では種類名を明記して論議をする以外はヒメジャコをさすものとする。

県と石垣市のシャコガイの漁獲量を図1に示した。（表1）。昭和48年1月以前の県の漁獲量はむき身重量であるために比較出来ない。昭和48年11月に481トン（殻つき）の漁獲量であったシャコガイは昭和51年には578トンと増加したが、この年を境に減少した。昭和52年に

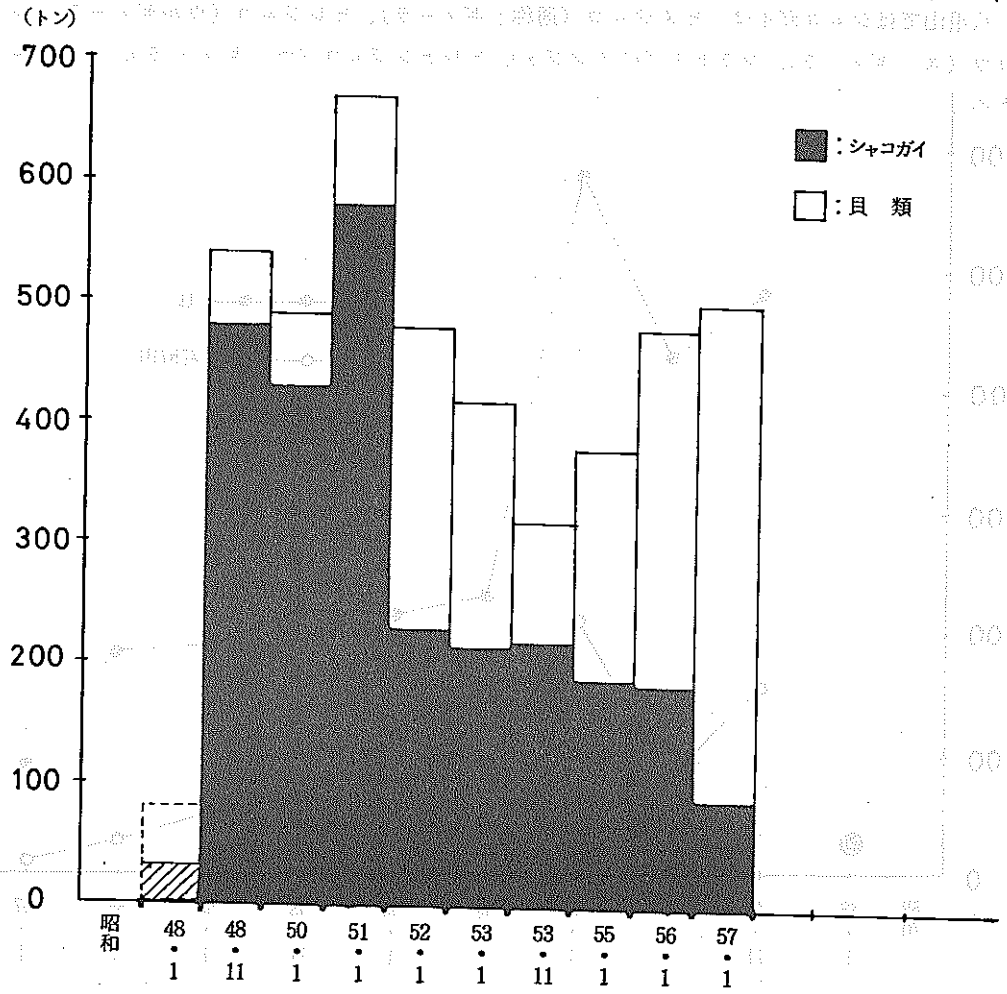


図2. 沖縄県の貝類とシャコガイの漁獲量
（沖縄農林水産統計年報より作成）
昭和48年1月はむき身重量

は前年の約40％しか漁獲されず、その後は横ばいの状態であったが、55年には200トン台を割り、57年には92トンとなった。ピーク時の16％しか漁獲されなかった。石垣市の漁獲量も同様に変動し、ピークは昭和51年の213トンであり、52年に94トンまで大巾に減少した。その後も斬減して57年には11トンとなりピーク時の5％にまで激減した。

県の貝類とシャコガイの漁獲量を図2に示した。昭和48年1月は資料がむき身重量であるために、他の年との比較には使用しなかった。昭和48年11月は貝類の漁獲量が537トンありその内481トン、89.6％がシャコガイの漁獲量であった。50年1月、51年1月までは貝類の約85％以上がシャコガイで占めていた。また51年1月は貝類全体の漁獲量も671トンと今までの最高を示した。貝類は52年1月の483トンから53年11月の322トンまで減少を続け、その後はまた増加をし、

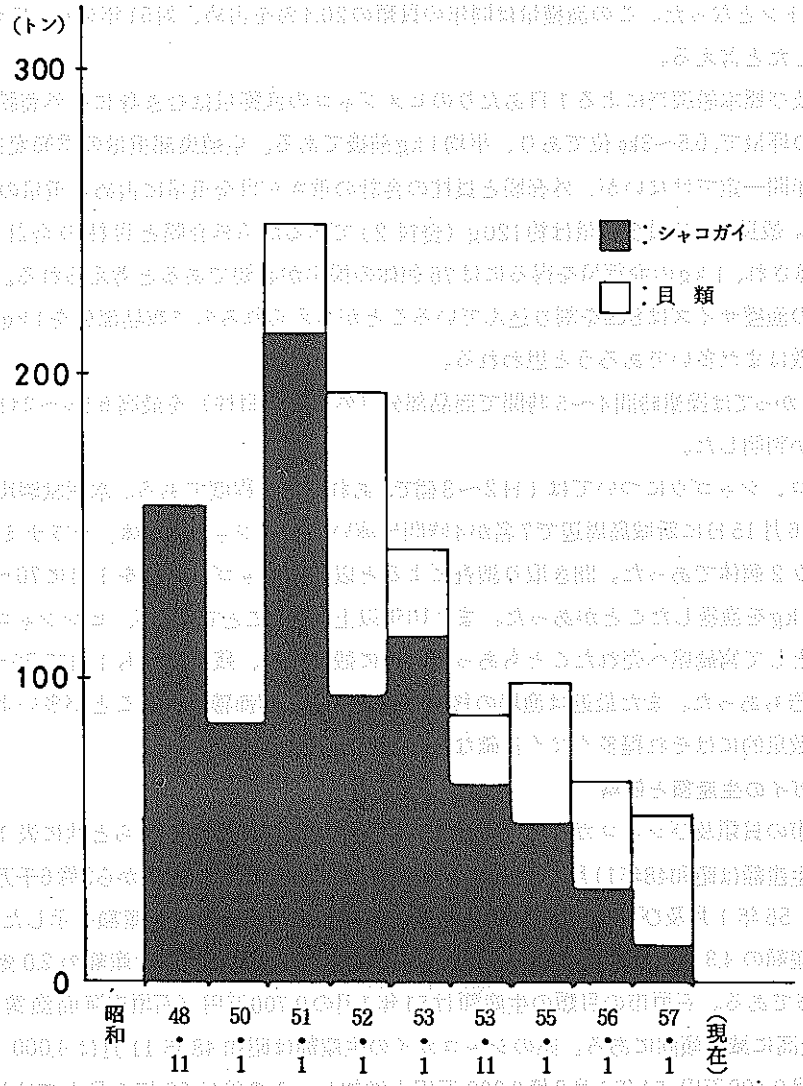


図3. 石垣市の貝類とシャコガイの漁獲量
(沖縄農林水産統計年報より作成)

昭和57年1月には498トンまで回復した。しかしながら貝類の中でシャコガイの占める割合は52年1月には前年の86.1％（578トン）から47.0％（227トン）に減少し、横ばい状態を続けた後、貝類が481トンに回復した56年1月には38.3％（184トン）となり、57年1月には18.5％（92トン）に減少した。

石垣市の貝類とシャコガイの漁獲量を図3に示した。昭和48年11月の貝類は156トンの漁獲があり、その全てがシャコガイであり、翌年の50年1月には85トンに減じたが、この年もシャコガイが100％であった。昭和51年1月は貝類が249トンと大きく増加し、そのうちシャコガイも85.5％（213トン）を占めた。この年を境に貝類の漁獲量は年々減り続け、57年1月には対51年比の約20％（54トン）にまで減少した。シャコガイの漁獲量は52年1月には94トンとなり貝類漁獲量の48.7％に減少した。シャコガイの漁獲量はその後一時増加したものの急激な減少傾向をたどり、57年1月には11トンとなった。この漁獲量は同年の貝類の20.4％を占め、対51年シャコガイの約5％であり激減したと言える。

聞き取り及び標本船調査による1日あたりのヒメジャコの漁獲量はむき身にし外套膜と貝柱の部分だけでの坪量で、0.5～3kg位であり、平均1kg前後である。生殖巣部重量の季節変動により、貝全重量は年間一定ではないが、外套膜と貝柱の合計の重さが貝全重量に占める重量の割合は約11％である。殻長8cmの貝全重量は約120g（資料2）であるから外套膜と貝柱の合計の重さは13.2gと計算され、1kgの漁獲量を得るには76個体の採集が必要であると考えられる。後述するように現在の漁獲サイズは8cmを割り込んでいることが考えられるので商品部分を1kg得るための必要漁獲数はまだ多いであろうと思われる。

調査では、かっては操業時間4～5時間で商品部分（外套膜と貝柱）を最高5kg～24kg採集していたことが判明した。

ヒレジャコ、シャゴウについては1日2～3個で、あればとる程度である。水産試験場の調査では昭和58年6月15日に新城島周辺で7名が4時間半泳いでヒレジャコ8個体、シラナミ9個体、そしてシャゴウ2個体であった。聞き取り調査によると以前はシャゴウだけを1日に70～80個体、身だけで27kgを漁獲したことがあった。また10年以上前とのことであるが、ヒレジャコは殻が碁石の原材料として宮崎県へ売れたこともあったために殻は売り、残りの身も1日で20～30kgとったとの報告もあった。また最近は漁場の移動からシラナミが漁獲されることが多いようであるが、これも数量的にはそれ程多くなく正確な数字は判明しなかった。

2. シャコガイの生産額と価格

県と石垣市の貝類及びシャコガイの生産額を海面漁業と沿岸漁業のそれらと共に表1に示した。県の貝類の生産額は昭和48年11月には4,400万円程度であるがその後は1億円から2億6千万円までの間を変動し、56年1月及び57年1月は2億円程度で安定している。最高生産額を示した51年1月では沿岸生産額の4.3％、海面生産額の1.8％を占めた。57年1月は沿岸生産額の2.0％、海面生産額の1.1％である。石垣市の貝類の生産額は51年1月の9,700万円（石垣市海面漁業生産額の9.0％）を最高に減少傾向にある。県のシャコガイの生産額は昭和48年11月は4,000万円であり、50年1月9,400万円、51年1月2億3,000万円と増加し、その後は52年1月までは1億円前後であったが57年1月には5,800万円に減少した。昭和51年の最高生産額時では沿岸生産額の3.8％、海面生産額の1.6％であった。57年1月では沿岸生産額の0.6％、海面生産額の0.3％に減少

した。石垣市のシャコガイ生産額は大巾な減少傾向にあり、昭和51年1月には8,500万円で石垣市海面漁業生産額の7.9％であったが、昭和56年1月では約1,700万円で0.6％にまで減少した。

表1　海面、沿岸漁獲量及び貝類、シャコガイ漁獲量（トン）

調査月日		昭和48.1	48.11	50.1	51.1	52.1	53.1	53.11	55.1	56.1	57.1
海　面	県	53,899	70,678	87,777	51,483	70,500	60,774	87,876	68,535	58,967	45,706
	石垣市	6,051	8,286	9,074	4,345	5,630	4,971	5,383	3,260	4,227	3,623
沿　面	県	8,941	12,197	13,173	13,287	12,446	13,214	11,954	11,476	13,395	13,747
	石垣市	-	1,441	1,941	2,737	2,950	2,364	2,110	2,408	2,574	2,399
貝　類	県	82*	537	488	671	483	422	322	378	481	498
	石垣市	-	156	85	249	193	142	88	99	66	54
シャコガイ	県	28*	481	432	578	227	215	222	187	184	92
	石垣市	-	156	85	213	94	113	65	52	31	11

（沖縄農林水産統計年報）

*：48年1月むき身重量

表2.　海面、沿岸生産額及び貝類、シャコガイ生産額（千円）

調査月日		48. 11	50. 1	51. 1	52. 1	53. 1	53. 11	55. 1	56. 1	57. 1
海　面	県	15,234,316	18,581,175	14,828,701	17,375,434	18,438,661	21,557,048	18,823,514	21,314,673	18,784,858
	石垣市	1,235,985	1,066,767	1,070,197	1,878,620	2,007,545	2,557,062	2,336,646	2,760,962	–
沿　岸	県	3,221,000	4,948,000	6,148,000	7,213,000	7,819,000	8,264,000	8,452,000	9,798,000	10,072,000
	石垣市	–	–	–	–	–	–	–	–	–
貝　類	県	44,200	107,199	261,316	164,373	183,596	148,701	176,907	200,714	201,371
	石垣市	10,920	7,469	96,662	72,542	–	40,833	46,743	36,226	–
シャコガイ	県	40,040	93,720	231,562	95,891	100,693	107,170	98,665	107,364	58,449
	石垣市	10,920	7,469	85,070	39,611	–	31,515	27,562	16,882	–

（沖縄農林水産統計年報）

シャコガイの価格は表2の生産額と表1の漁獲量から生産額を漁獲量で除して殻つきの値段に計算し表3に示した。kgあたりの価格は昭和48年11月の83円から51年1月まで1年ごとに約倍となって401円となった。その後も除々に高騰し、55年1月には528円、57年には636円となった。漁獲量の減少から考えると、品薄による高値安定と考えられる。

石垣市の場合も価格の高騰が51年1月にあり、その後は県よりも1～2円安値だが高値安定で移行している。

表3.　統計年報によるシャコガイの価格（円／kg）

調査月日	48.11	50.1	51.1	52.1	53.1	53.11	55.1	56.1	57.1
県	83	217	401	422	468	483	528	584	636
石垣市	70	88	399	421	–	482	530	545	–

（沖縄農林水産統計年報より計算）

聞き取り及び標本船調査での価格を述べるとヒメジャコの場合若干の変動はあるが、島内では商品部分（外套膜と貝柱）が1kg 5,000〜6,000円である。しかしながら沖縄本島（那覇）へ送ると8,000〜10,000円程度で取引されてるとのことであった。

石垣市での小売価格は石垣市内のスーパーマーケットで7,000〜8,000円であった。

他のシャコガイの価格はヒレジャコが1,500〜2,000円、沖縄本島（那覇）へ送ると3,000〜4,000円（高値）するとのことであった。また不定期ではあるが生きたままで島内のレジャー施設に1個体小さいもの1,000円、大きいもの1,500円で取引されている。殻も不定期で売られており、小さいもの250円、大きいもの500円である。シラナミは2,500円で取引されている。

シャゴウは以前は売れなかったので自家消費用としていた。八重山では加工用の原材料として使用されることが主なので、仲買によっては買わない人もいるとのことであった。しかしながら最近は加工業者が1,500〜1,700円程度で入手しているので漁業者からは1,000円以上で売られているものと思われる。晴天時に集めておき蓄養して台風時に沖縄本島（那覇）へ身のみを出荷すると2,000〜2,500円で取引されるとも聞いた。また小浜島では殻長20㎝以上のシャゴウは生きたまま殻ごと1個1,500円で島内のホテルへ納品されている。

オオジャコ・ヒレナシジャコについては、貝殻自体に稀少価値が生じるので別問題であり、漁獲もほとんどないのが現状である。

聞き取り及び標本船調査によるシャコガイの価格を表4にまとめた。

今回の調査により、シャコガイは全種共商品価値があり、またその価格の高いことがうかがわれた。

表4. 聞き取り及び標本船調査によるシャコガイの価格（昭和59年2月現在）

	ヒメジャコ（ギィーラ）	ヒレジャコ（ウルギィーラ）	シラナミ（パインジャ）	シャゴウ（スーギィラ）
（食　用）				
八重山での販売	円	円	円	円
仲　買	5,000〜6,000	1,500〜2,000	2,500	1,000〜
小　売	7,000〜8,000	−	−	1,500〜1,600（加工業者入手分）
沖縄本島へ出荷				
仲　買	8,000〜10,000	3,000〜4,000（高値）		2,000〜2,500（台風時）
（食用外）				
八重山での販売				
生　体	−	1,500	−	1,500（20㎝以上）
貝　殻				
大	−	500	−	−
小	−	250	−	−

3. シャコガイの漁獲サイズ

シャコガイは雄性先熟性の雌雄同体である。小型個体の性巣部は精巣のみであり、大型になると精巣と卵巣が混在し、再生産に寄与出来るようになる（資料3）。そのために漁獲サイズの小型

化は資源の回復に大きな影響を与える。そこで以前に行なった調査の資料を整理した。

調査 I

シャコガイ漁業の中心地である石垣市の登野城漁港では採集して持ち帰ったシャコガイをむき身にして商品化する作業がおこなわれ、その貝殻は港に捨てられて、累累としている。
採集時期が新しい貝殻は殻捨て場の上に捨てられ、貝柱等の組織片が残っており、殻もきれいである。観察では下の方の貝殻は汚れており大きいものが多い様であった。また殻長10cmを越すような貝殻は新しいものではほとんど見られず、汚れているものか下の方のものであった。
昭和55年6月6日に前述の殻捨て場から組織片のまだ残っているヒメジャコの殻を3ケ所から合計65個体採取し、試験場に持ち帰り、真水に浸して組織片を取り除いて乾燥させた後、殻長・殻高・殻巾と殻の乾燥重量を測定した。結果は図4に採取した個体と昭和56年から58年まで水産試験場八重山支場で種苗生産用親貝として使用した個体の度数分布を示した。採取個体と種苗生産用親貝の度数分布の集中点は離れており、採取した個体の度数分布は5～6cmに集中しており、種苗生産用親貝は8.5～9.5cmに多く集まっていた。採取個体の殻長の平均は5.99±1.37cmであり、最小殻長は4.30cmであった。また種苗生産用親貝は平均9.63±0.86cmで最小は8.12cmであった。
調査年月日の石垣市のシャコガイの漁獲量は昭和56年1月現在の資料で表わされており31トンと表1中で下から2番目を示している。

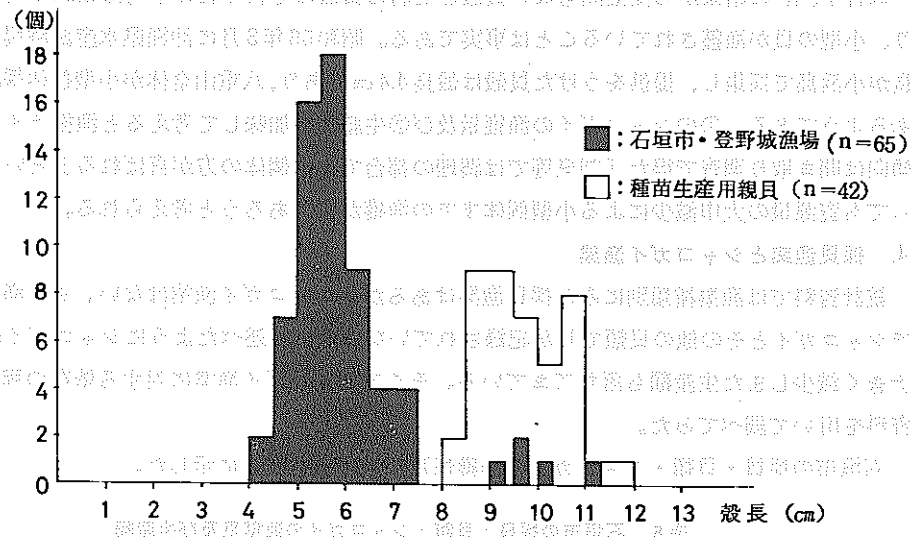


図4　ヒメジャコ貝殻の度数分布

調査 II

昭和56年7月24日に八重山支庁の諸見里聡普及員によって調査Iと同所から上層（表面）と下層（表面から約20～30cm下）に分けて採集され、試験場に持ち込まれたヒメジャコ貝殻の度数分布を調べた。採集個体数は上層66個体、下層46個体であった。結果は図5に示した。上層では5.5～6.0cmに集中点があり、下層では7.0～7.5cmが9個体で最も多く、下層は7.0～7.5cmより大きい方によく分布し、上層は小さい方に分布していると言える。上層の平均は6.30±1.12cmであり最小個体は3.39cmであり、下層は8.17±1.88cmで最小個体は5.06cmであった。上層と下層の平均の差が1.87cmであった。

上層の貝殻と下層のそれとの間に海での採集年月にどの程度の時間差があるかは不明であるが、漁獲サイズが小型化してきているかがうかがわれる。

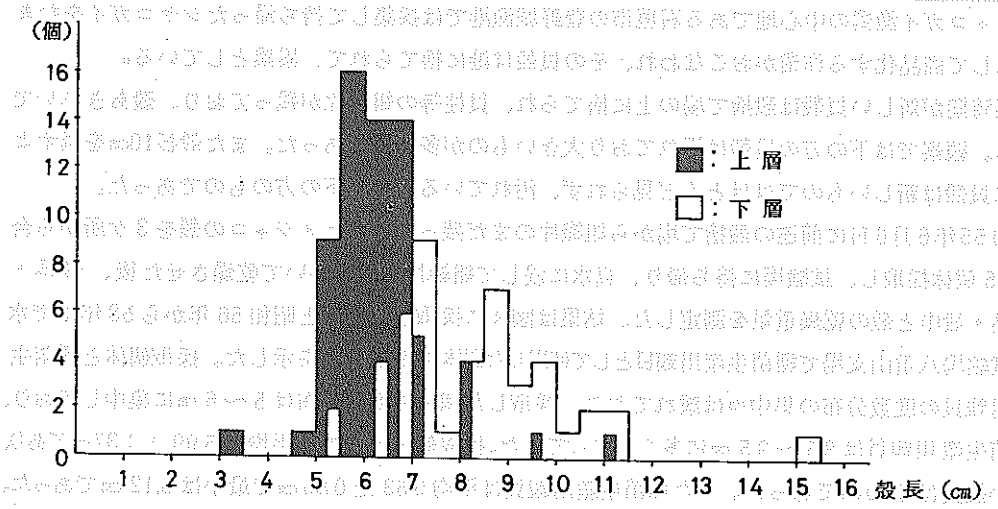


図5　石垣市・登野城漁港のヒメジャコ貝殻の度数分布

調査Ⅰ、Ⅱの結果から採集間もない貝殻と上層の貝殻のそれぞれの平均は5.99cmと6.30cmであり、小型の貝が漁獲されていることは事実である。昭和56年3月に沖縄県水産試験場の嘉数清次長が小浜島で採集し、提供をうけた貝殻は殻長4.4cmであり、八重山全体が小型個体採取の傾向にあるようである。①のシャコガイの漁獲量及び②生産額を加味して考えると漁獲サイズの小型化傾向は聞き取り調査で得た「割烹等では調理の都合で小型個体の方が喜ばれる」ということはあっても資源量の大巾減少による小型個体までの漁獲が主であろうと考えられる。

4. 採貝漁業とシャコガイ漁業

統計資料では漁業種類別にみた採貝漁業はあるが、シャコガイ漁業はない。また漁種別漁獲量でシャコガイとその他の貝類でしか記録されていない。①で述べたようにシャコガイの漁獲量は大きく減少しまた生産額も落ちてきている。そこでシャコガイ漁業に対する依存の程度を、統計資料を用いて調べてみた。

石垣市の採貝・貝類・シャコガイの漁獲量及び生産額を表5に示した。

表5.　石垣市の採貝・貝類・シャコガイの漁獲量及び生産額

調査月日	漁獲量（トン）			生産額（千円）			②/①	③/①	③/②	⑤/④	⑥/④	⑥/⑤
	①採貝漁業	②貝類	③シャコガイ	④採貝漁業	⑤貝類	⑥シャコガイ						
昭和												
48.11(現在)	156	156	156	13,299	10,920	10,920	100.0	100.0	100.0	82.1	82.1	100.0
50. 1	85	85	85	7,469	7,469	7,469	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
51. 1	179	249	213	69,084	96,662	85,070	139.1	119.0	85.5	139.9	123.1	88.0
52. 1	105	193	94	42,542	72,542	39,611	183.8	89.5	48.7	170.5	93.1	54.6
53. 1	117	142	113	44,008	–	–	121.4	96.6	79.6	–	120.2	–
53. 1	98	88	65	52,847	40,833	31,515	89.8	66.3	73.9	77.3	59.6	77.2
55. 1	137	99	52	87,061	46,743	27,562	72.3	38.0	52.5	53.7	31.7	59.0
56. 1	164	66	31	157,583	36,226	16,882	40.2	18.9	47.0	23.0	10.7	46.6
57. 1	146	54	11	–	–	–	37.0	7.5	20.4	–	–	–

（沖縄農林水産統計年報より作成）

貝類及びシャコガイの漁獲量と生産額は減少を示しているのに、採貝の漁獲量及び生産額は増加している。昭和56年1月の資料では、採貝は164トンの漁獲量で157,583千円の生産額をあげているが貝類は66トン(40.2%)、36,226千円(23.0%)であり、シャコガイはそのうち31トン(採貝の18,9%、貝類の47.0%)、16,882千円(採貝の10.7%、貝類の46.6%)であり、採貝に占める割合が低くなっている。しかしながら昭和53年頃までは採貝の漁獲量及び生産額が下まわっていることがある。これは貝類及びシャコガイが他の漁業種類でも漁獲されているためであろうと思われる。
昭和56年1月の県の漁業種類、魚種別漁獲量を調べてみると採貝漁業は519トンの漁獲量があり、その内魚類が57トンでフエフキダイ科、スズキ科、ブダイ科、ベラ科、アイゴ科の魚を漁獲しており、水産動物が41トンでイセエビ、甲イカ、シロイカ、タコがとられている。そして貝類が420トンでそのうちシャコガイが161トン、その他の貝類が259トンである。(統計では内訳と合計で1トンの不足がある)。他の漁業で貝類が60トン漁獲され、そのうちシャコガイが22トンとられている。22トンのうち5トンは追い込み網が漁獲している。これらのシャコガイの漁獲量合計が県計の184トンとなっている。

石垣市の魚種別漁獲量は統計年報では掲載が省略されているので、県の採貝漁業の漁種別漁獲量と生産額を表6に示し、魚種別漁獲量比率を図6に示した。

表6. 沖縄県の採貝漁業の魚種別漁獲量と生産額

調査月日	漁獲量(トン)	魚種別漁獲量(トン)				生産額(千円)
		魚類	水産動物	その他の貝類	シャコガイ	
昭和						
48年11月(現在)	469	0	0	31	438	38,480
50年1月	440	0	0	40	400	95,405
51年1月	458	0	1	38	419	180,316
52年1月	462	0	5	72	185	85,011
53年1月	365	0	71	156	138	137,290
53年11月	314	1	12	84	217	152,847
55年1月	346	23	19	144	160	186,428
56年1月	519	58	41	259	160	300,103
57年1月	507	56	41	338	72	276,619

(沖縄農林水産統計年報)

採貝漁業の魚種別漁獲量の中で水産動物が出現するのは昭和51年1月の表6の1トン、図6の0.2%からであり、魚類は昭和53年11月の表6の1トン、図6の0.3%からである。シャコガイは昭和48年11月から51年1月まで採貝漁業の90.9～93.4%の漁獲量を占めていたが、その後6年を経過した昭和57年1月の調査では14.2%にまで激減している。これは前述のシャコガイの漁獲量の推移と平行して動いていると言える。そしてその他の貝類は昭和48年11月から6.6%から66.7%に急増している。水産動物は昭和51年1月の1トン(0.2%)から昭和57年1月の41トン(8.1%)と増加している。水産動物が昭和53年1月の71トン(19.2%)と前年の5トン(1.9%)から大巾に増加した内訳はウニが65トン、この年のみに採貝でとられたためであり、他の年にはウニの漁獲は採貝ではなく主に「その他の漁業」で漁獲されている。魚類は昭和53年の1トン(0.3

%）から昭和57年1月の56トン（11.0%）と増えてきている。採貝漁業の中で魚類、水産動物が出現し、増加傾向を示し始めたのとその他の貝類の比率が高くなり出したのは、おおまかには図1に示したシャコガイの漁獲量が578トンから227トン（対前年比39.3%）に大巾に減少した昭和52年1月1日現在の調査の1年前、昭和51年頃からであると言える。

県の採貝漁業に占めるその他の貝類の漁獲量の比率は昭和53年1月に42.7%（156トン）でシャコガイを抜いて第1位となり、昭和53年11月には逆転し26.8%（84トン）で第2位となった。昭和55年1月には41.6%（144トン）となりシャコガイの46.2%（160トン）に近づき、昭和56年年1月で49.9%（259トン）、シャコガイは31.0%（160トン）でまた第1位となり、昭和57年1月には66.7%（338トン）で、シャコガイの14.2%（72トン）を大きくひき離した。その他の貝類とは、タカセ貝、夜光貝を主としてチョウセンサザエ、クロチョウガイ等であるが、これが採貝漁業の中心となり、シャコガイ漁業は衰退しつつあることを示している。しかしながらその他の貝類も図3や表4に示し、前述したように石垣市ではすでに漁獲高及び生産額でも減少傾向にある。

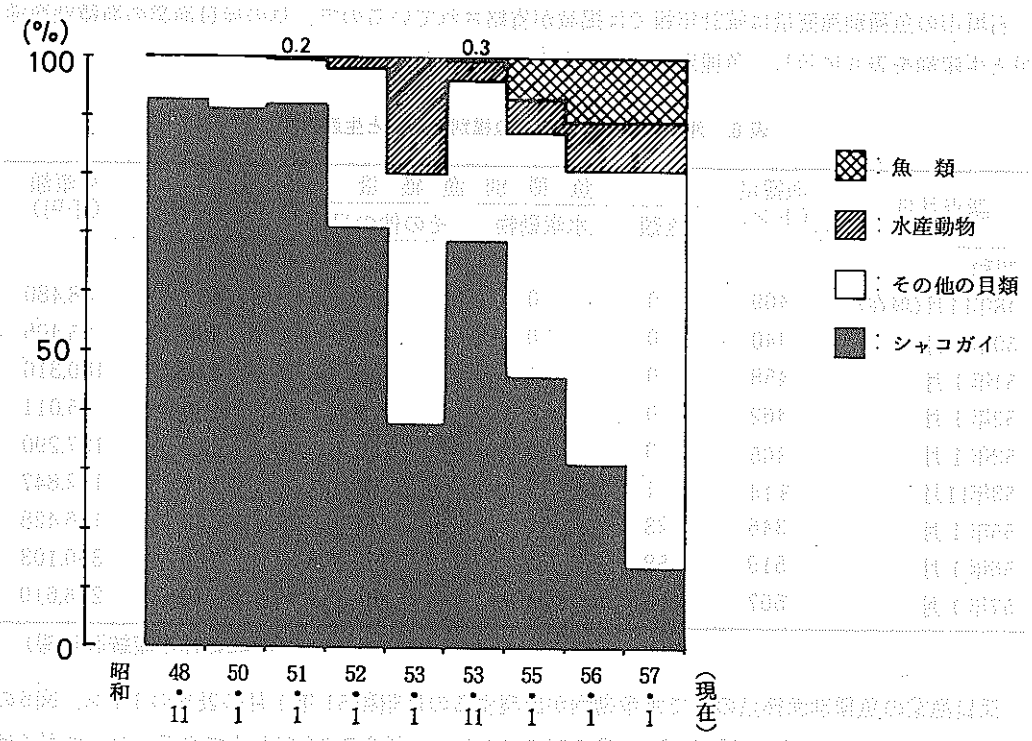


図6. 沖縄県の採貝漁業の魚種別漁獲量比率
（沖縄農林 水産統計年報より作成）

石垣市以外の地区でもその他の貝類の漁獲高が減少し始めた時、統計資料上は採貝漁業中に占める比率が低くなることである。このことは増加傾向を示している魚類及び水産動物への依存率が将来増々強くなっていくことが予測され、採貝漁業という漁業種の崩壊を意味すると共に一本釣、刺網、追い込み網、定置網等他の漁業種との競合や、次の資源の加速的な食いつぶしが懸念される。

八重山での採貝及びシャコガイ漁業の現状を現地資料及び聞き取り、標本船調査によって補足する。

八重山漁業協同組合の西表亨参事の提供情報：

(イ) 採貝漁業者は現在登野城地区では9隻である。小浜島でも一部シャコガイをとっている。操業期間は夏期の晴天時で月に20～22日間出漁する。

(ロ) 漁場は小浜島から西表島であり悪天候時は白保へ移動する。漁獲対象物は同時にタコ、魚、タカセ貝等を採捕し、シャコガイ漁専業では苦しい。

(ハ) 漁獲物はほとんど地元消費で昭和55年以降は漁協での扱いはない。昭和57年に県漁連からの依頼で地元で集め那覇へ出荷したことがあった。

(ニ) 漁協では黒蝶貝は買い上げている。

(ホ) 6年前に自主規制案を出したが、漁業者・加工業者の反対で実現しなかった。

八重山支庁玉城正雄水産係長の提供資料では現在シャコガイを中心にとっている人は11名で、かっての主な採貝漁業者は19名である。

聞き取り調査では登野城地区の採貝漁業者はシャコガイ（ギィーラ）の他にタカセガイ（ウナヴァ）、夜光貝（ヤクゲ）、黒蝶貝（ヒィーク）、魚、エビ、タコ等もぐり漁でとれるものは何でも漁獲している。また最近では若年層を中心に夏は前述の漁業を行ない、冬は一本釣漁業者が漁に出れなくて魚価が高くなるので電灯もぐり漁（夜間に湖礁内へ船を出し、水中ライトを持って潜水し、活動の鈍った魚を漁獲する漁）をおこなっている。中年層は冬も夏も同様の漁業であるが、冬場のシャコガイの依存率は生産額の約25～30％程度であった。

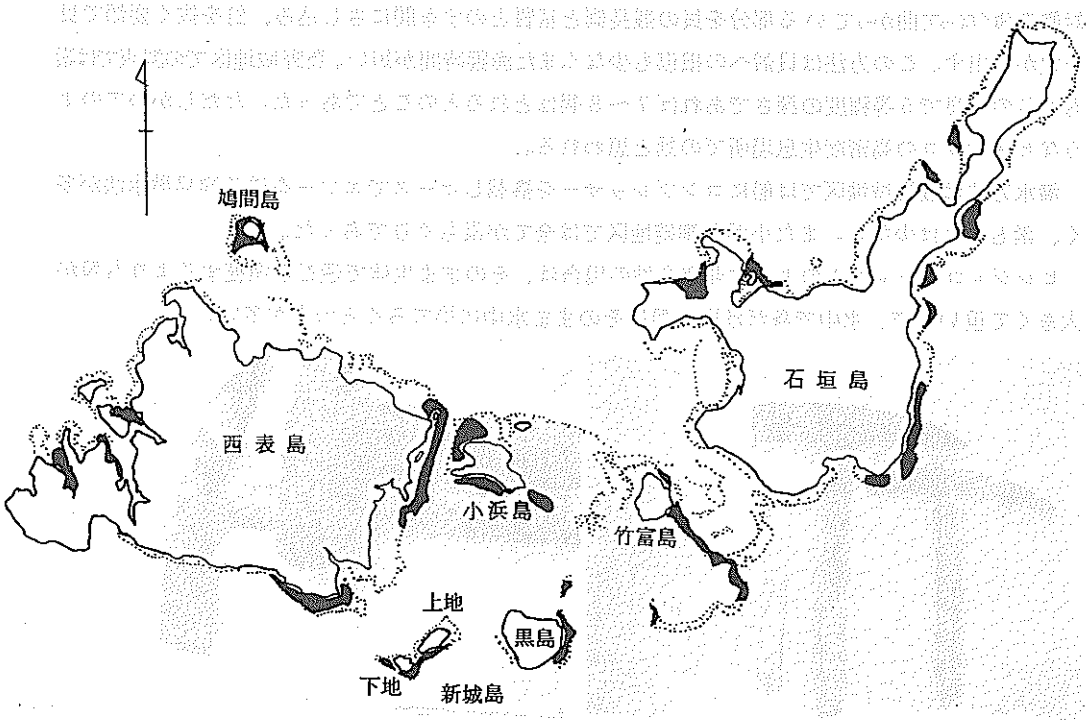


図7. シャコガイ漁場
●：以前の多産地

小浜島での聞き取り調査では、夏は大半がシャコガイ中心の漁であり、冬は一部の人が継続し、残りは刺網漁に変わる。

現地資料及び聞き取り、標本船調査でもシャコガイ漁業専業では生計が立てられない現状にあり、他魚種への依存が目立っている。

登野城地区での冬期電灯もぐり漁への移行は、他の漁業種類の今後の漁獲量との関係に注目する必要があると思われる。また同地区の採貝漁業は、沖縄の伝統的なもぐり漁からの派生であり、それが電灯もぐり漁へ移行していったことと、小浜島での刺網への移行との対比は漁村の成因を分析する上で興味が持たれる。

5. シャコガイ漁場

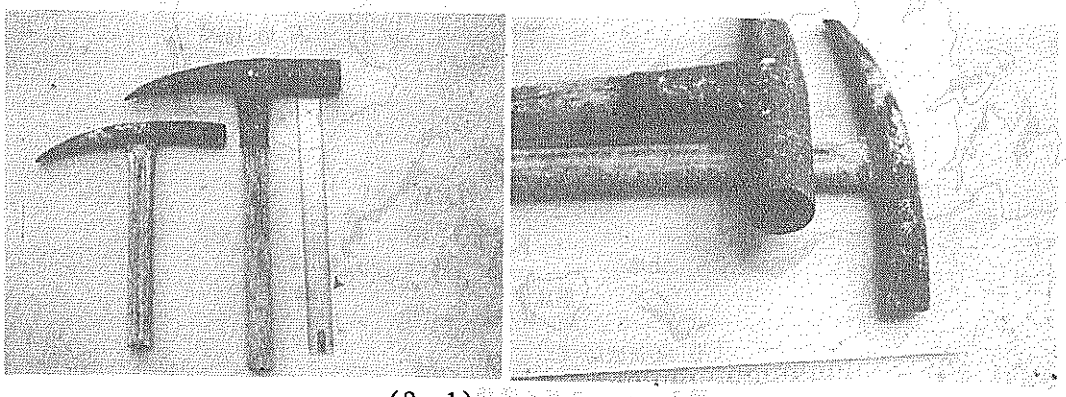
図7に石西礁湖の地図を掲載したが、シャコガイ漁場、特にヒメジャコの場合はリーフの内側で穿孔基質となる琉球石灰岩やハマサンゴ等の塊状サンゴがあれば生息している。現在はとり残しを漁獲している状態であり、1ケ所に多産するところは少なくなってしまった。西表島の網取湾や崎山湾、鳩間島、石垣島の白保。崎枝、川平、伊原間周辺も多かったが、主たる多産地帯は石西礁湖内であった。

6. 漁　具

穿孔性のヒメジャコの場合は図8－1の右側に示すような金槌の頭の部分が図8－2のように丸型で中央部がへこんでおり、反対側が先端にいくに従って薄くなって曲っているものと図9にはないが頭の部分が角型で同じく中央部のへこんでいるものがよく使用されている。また一方がタガネのようになっており一方が薄くなって曲がっている図8－1の左側に示すものも使用されている。これらの漁具を用いて、まず頭の部分で貝が穿孔している基質を貝を割らないようにたたき、反対側の薄くなって曲がっている部分を貝の殻長側と基質とのすき間にさし込み、釘を抜く要領で貝を穴から出す。この方法は貝殻への損傷も少なく、また漁獲時間が短い。登野城地区での調査では素もぐりの一息で5尋程度の深さであれば7～8個はとれるとのことであった。ただしかつてのようなヒメジャコの高密度生息場所での話と思われる。

潜水方法は登野城地区では船にコンプレッサーを搭載しホースでエアーを送る簡易潜水法が多く、素もぐりは少ない。また小浜島細崎地区では全てが素もぐりであった。

ヒレジャコやシャゴウのような非穿孔性の場合は、そのまま生体で殻ごと漁獲するよりも殻が大きくて重いので、水中で身だけ取り殻はそのまま水中に捨てることの方が多い。



(8－1)　　(8－2)

図8　シャコガイ採集漁具

7. シャコガイの流通

シャコガイの流通経路は図9に示した。

漁業者はシャコガイについては仲買へ渡すケースが多い。各漁業者によって仲買は決まっており、それには歴史的な旧階層が生きている場合が多くみられる。仲買はそれを市場に卸すが、仲買人によっては飲食店に直接配達してまわるものもある。最近では漁協が利用される場合は本島周辺が台風等でシャコガイが品薄になった時や県漁連から依頼があった時の那覇送り分のみとなっているようである。漁業者によると仲買との関係からその場合も地元では安価なヒレジャコやシャゴウを送る場合が多いとのことであった。漁業者が直接沖縄本島や消費者に送り込んでいるケースもあるが少ない。

加工者は後述するように原材料の不足から島外の買入れが主となっており、地元の漁業者及び仲買からは少なくなっている。

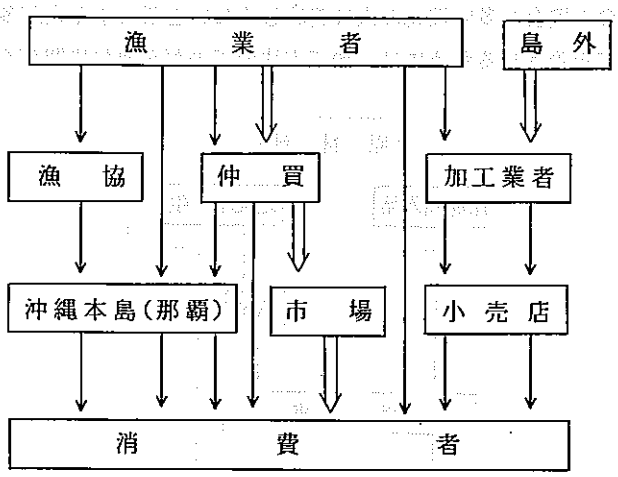


図9　シャコガイの流通経路

8. シャコガイの加工

シャコガイの加工は塩からとして製造され、主として観光土産として販売されている。使用される原材料はシャゴウ及びヒレジャコが主である。加工業者は石垣島では4業者である。

八重山支庁の玉城正雄水産係長の提供資料と聞き取り調査によると業者Aは原材量が不足のため那覇から年間1,200kgの冷凍品を購入して材料を確保し、地元産は600kgを使用している。冷凍品の産地はフィリピンではないかと想像され、1ブロックが15kgであり、内味はヒレジャコ、オオジャコ、シャゴウ等の外套膜(シバ)のみで、貝柱(ニ)はないとのことであった。原材料単価はキロあたり1,600～1,700円位になるとのことで地元のものを使用するのと同額位だということであった。加工数量は1,800kgで金額は3,600,000円であり、販売状況は土産店及び一般店に卸し、島内90%、県内島外10%である。原材料としては月300kg平均が必要だが現在1／2しかないとのことであった。業者Bは地元産の原材料のみで300kg、内訳はシャゴウが30%、ヒレジャコが70%

である。加工数量は300 kg、金額540,000円である。業者Cは昨年位から原材料の確保がつかないので製造を中止しており、入手出来た時だけつくるとのことであった。この業者も冷凍品を使用した経験があり、価格は24kgで45,000円(キロあたり1,875円)であった。那覇の輸入業者から購入しており、業者の話では材料の産地はフィリピンであろうとのことであった。またこの業者のところに、フィリピンでは中華料理用には、貝柱だけを使用するので、その他の部分は売れない。しかし沖縄では外套膜は塩からに出来るので、現地で冷凍にする前に軟体部を必要部分だけに処理する 仕事と買 付けの件の話があったとのことであった。業者Dは貝柱だけの製品、外套膜が主な製品、そしてウニとシャコガイを混ぜたもの等を製造している。どの業者も原材料が不足であると述べていた。

シャコガイの塩からの製造方法はA業者から聞き取りをした(図10)。原材料を塩でアク抜き後2回塩漬し、酒ですすいでから細断し、調味をしてからビン詰する。この工程はかつおの塩辛等と違って4日間位で製品にすることが出来る。

味覚については生食の機会が多い地元の人は美味しくないと断言する人が多い。そのことを加味して観光土産として定着させるためには、加工方法の工夫が必要な時期がくるものと思われる。

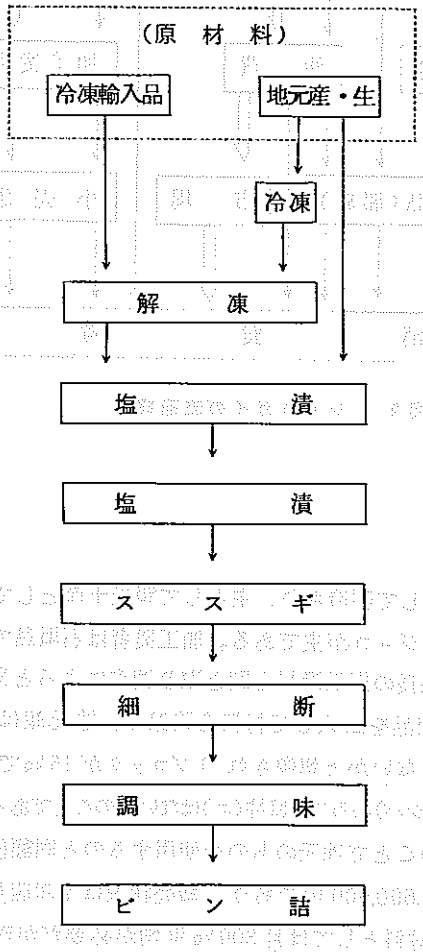
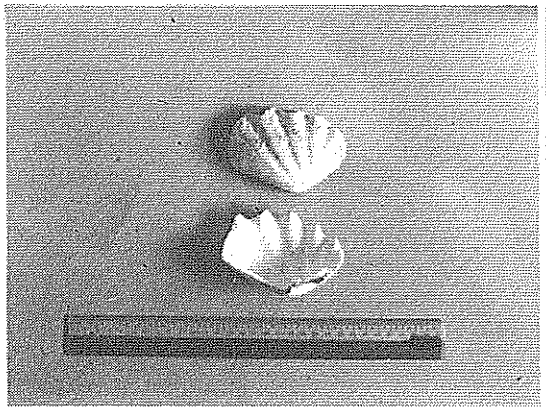
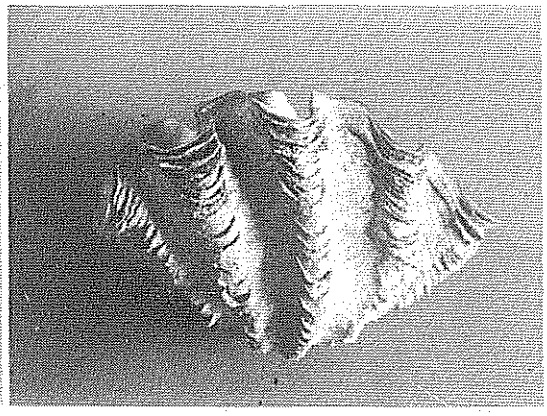


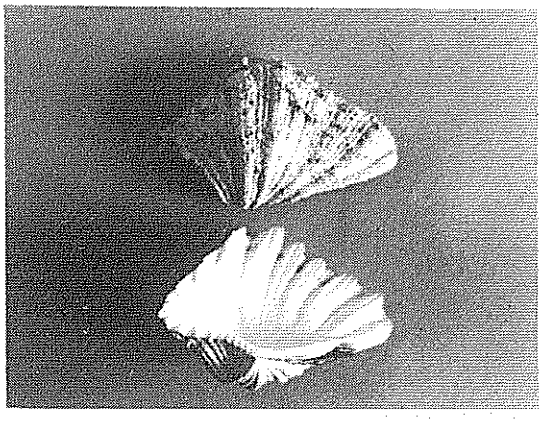
図10 シャコガイの塩から製造工程



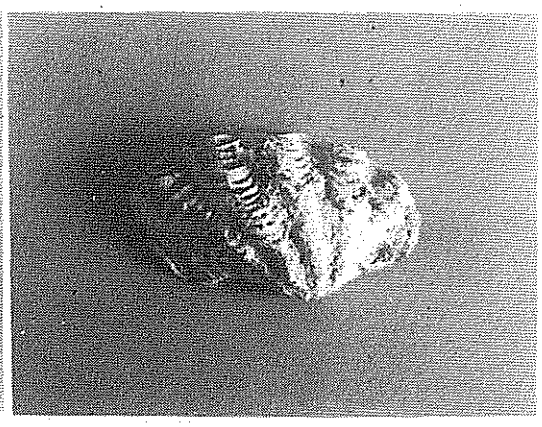
ヒメジャコ（ギィーラ）
Tridacna crocea



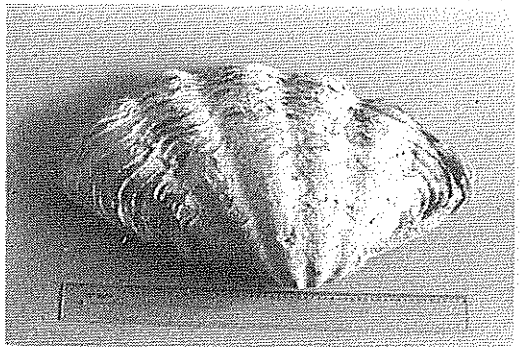
ヒレジャコ（ウルギィーラ）
T. squamosa



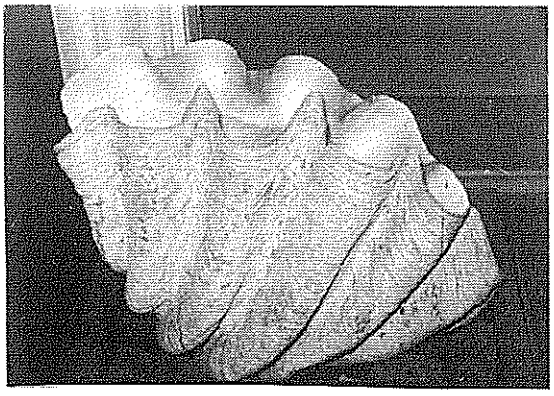
シャゴウ（スーギィーラ）
Hippopus hippopus



シラナミ（パインジァ）
T. maxima

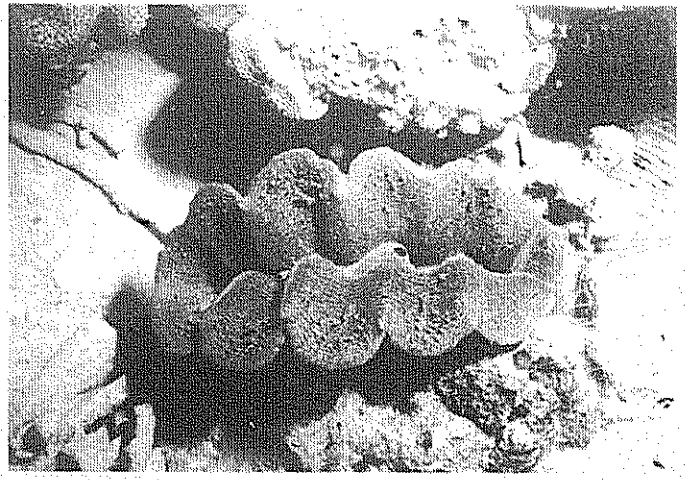


ヒレナシジャコ（マーギィーラ）
T. derasa

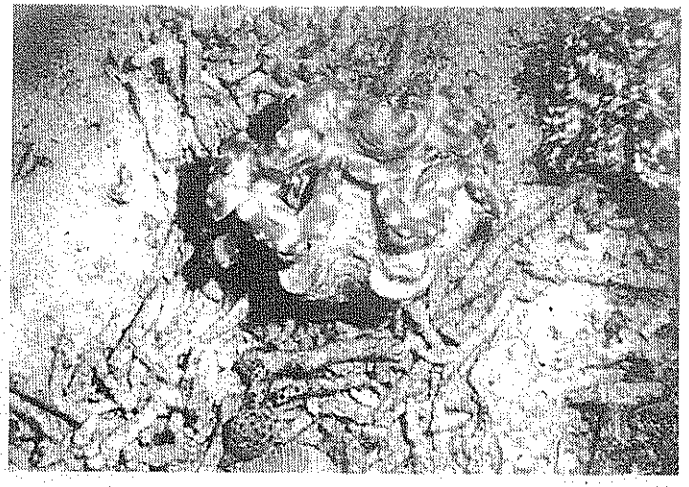


オオジャコ（マーギィーラ）
T. gigas

図　11－1　シャコガイの種類

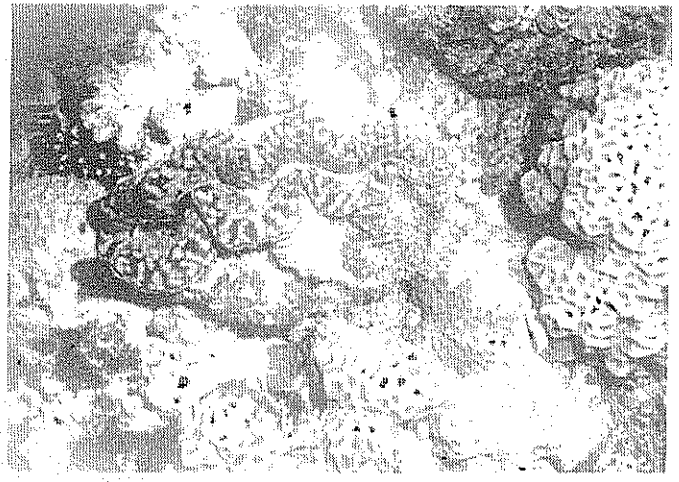


ヒメジャコ（ギィーラ） *Tridacna crocea*



ヒレジャコ（ウルギィーラ） *T. squamosa*

シャゴウ（スーギィーラ） *Hippopus hippopus*



シラナミ（パインジァ） *T. maxima*

図　11－2　シャコガイの種類（水中）